

「はあ、はあ♡ 男子トイレの中でオナニー気持ちいい♡」

「ビキニにそそり立つた、ふたなりチンポお、ここで扱くの、たまらなく興奮するう♡ あう、あう、カウパー、びゅっぐびゅぐう、噴きあがつてえ、射精しそうつ♡」

「ハハ」ボクのお気に入りの異界領域の一つになりそうツ♡ もし、男子が入つてきたら、おふ、おふ、おほおつ……♡」

「絶対、異界領域から飛び出して♡ 襲うちやうよ♡ くふ、んぶう、獲物を待ちながらの、オチンポシンコン♪♡ いい♡ いいのお♡ 気持ぢよすぎいソ♡」

「あ……誰か来て……ふー、ふー♡……」

「あはつ♡ 開いてるよお……♡ きちんと時間通りだね。いい感じ♡ ハハに約束通り来たつてことは、くすす、今、キミが持つてて、その空のペットボトルのお使いも、きちんと出来たつてことだけね、えらいえらい♪」

「うんうん、ボクの言いつけどおりに、ペットボトルに詰めた高い濃度の妖気がたっぷり入つた精液、学校中に撒いてこれたみたいだね」

「裏庭、体育館の水場、それに教室のロッカリーまで撒いておけば、校内全体が異界領域になるのも時間の問題かな」

「ボクの眷属としての役割、ちゃんと果たせてるじゃない。んふふ。頭を、なーでなーで、いつぱい褒めてあげるね。本当によくできたね。お言ひつけを守れて、えらい♪」

「キミと一緒に学校内に異界領域を作り始めて、もう1週間ぐらいかな。」

「妖魔にとって、だいぶ居心地のいい空間になつたよね。襲いたいとき人に間を手近な領域に連れこんで、食べちゃうこともできるしね」

「でも、ボクにとっては、やっぱりキミが一番かな。ほらあ、もう少しつかちへ来て。うん、完全に異界領域に入つてきて」

「ん~、なにかなあ？ モジモジしちゃつて。」

「その、物欲しそうな視線♪ ボクのふたなりチンポに、釘付けで、くふつ♪ ごめんね、意地悪だったかな。ボクもキミに勃起をガン見されて、悪い気はしないよ」

「校内に異界領域を広げるお手伝いをきちんと出来た眷属くんには、きちんとドスケベなご褒美、あげないとね」

「そうだね、ボクもオナニーの最中だつたし、キミも、ボクのそばにきて、うん、そうだよ」「それじや、オチンポ見せて♡ ふたりで一緒に、見せあいオナニーしようよ♪」

「恥ずかしがてるなら、命令つ♡ 眷属くんなら、絶対服従だからね。くすす。もう、勃起してるよね？ その浅ましいチンポ露出して、ボクの前でシコシコ、扱いてよ」

「ほら、出したオチンポをボクも扱くから、キミも♡ しゃしゃーしゃしゃー♡」

「扱きながら聞いて♪ 最近、キミ、クラスの噂だよ。すっごく仕草が、色っぽくなって、男子も女子も、みんな困惑してる。くすっ♪」

「ね、同級生の男子に犯されたりするところ想像して今みたく、オナニーしてるの?」

「あ、オチンポ扱く手が早くなってる♪ しかも、勃起もすぐになって、図星なんだ♪」

「くふふ、いやよ、そのまま射精しても。ボクの見てる前で、んん、はあはあ、しろつ、オナニーでチンポ汁う、びゅぐびゅぐう、出しちゃえーつ♡♡」

「あん、すうまい精液の量、ドロドロで濃くてえ……ボクの眷属として、誇れるよ、んん……校舎の色んなところでエッチして妖気をばらまいて異界領域を広げて学校を餌場に、もつともうと楽しめるね、んふふふ♪」

「ん、んん、せーし、まだ沢山溢れてえ。この量ありえないよお、はあはあ♡」

「キミ、祈祷師よりぜんぜん妖魔の方の才能があるよ♡ はあはあ、エッチにぶつかかれた良すぎてボクもオナニーはかどりやうつ♡」

「んはつ、んはあん、イク、イクイクう♡ ほらあ、ボクも射精するう♡」

「んああツ♡ んうはあああーツ♡♡」

「んん、はあはあ、ザーメンぶつけえ、気持ちいいくふふ、キミもボクのせーしまみれで、すつじくアヘつた顔しちゃつてる。かわいい♡」

「じゃあ、邪魔な服も消しちゃおつか♪ これで全裸になつて、マジ眷属くんらしい格好だね。ほらあ、こちにきて。んふ、お待ちかねの本番、しよう♪」

「このまま便座に座つたボクに跨つて、んん、そう、腰を下ろしていくつ♡ あ、ああ、奥まで、ずつぱり入つちやつたね」

「ね、言うの忘れてたけど——放課後だけ、まだ時間が早くて、校舎内に残つてゐるところそこいらにいるし、もしかしたら、このトイレに入つてくるかも♡」

「ね、ボクに犯されてると、見られたい?」

「んふ、黙つてないで教えてよ」

「て、話をしてたら、誰か入ってきたね」

「今、ボクらは異界領域の中にあるから、向こうから、こちちは見えないけど。でも、見られながらするの気持ちいいよ」

「否定してもダメ。キミのアナル、きゅうつて締まって見られたと想像して、興奮してるね。ん、ん♡」

「いつも異界領域を解いて、ボクらのセックスちゃんと見てもらつ?」

「ボクはどうでもいいよ。人間の良識がまだ残つてゐるキミのほうが、断然、恥ずかしいはずだけど♪」

「でもキミ、露出マゾっぽいし、そつちのが興奮する?」

「もしかして、僕は…う…びついヤツ♪ くふつ♪ んん♪ ちょっと恥ずかしがりすぎだつて。くう、くううう、お尻の穴あ、きゅうううつて締まりすぎて……はあはあ、もう無理い……んんん、中に出すよつ♥」

「幼馴染のお… 主人様の… へつせいせーしお尻の穴にいっぱいちそうして、あ、げ、る♥」

「んうつ♥ んうううううーっ♥ ♥」

「んふ、キミもイケたみたいだね♥」

「アヘた顔して、そんなんに精液、お腹に出されるの良かつたの?」

「ほらあ、今度はバックからしてあげるから、立ち上がって、ボクにお尻を、うん、そうだよ」「手をドアについて、このまま後ろから、オチンポ♪ 挿入するね。んんん♥」

「んふふ、二回目で、キミの中、すうごく柔らかくて……ほらあ、恥ずかしい格好でファックされてるにお尻振つて、悦ばないの♥ ん、んん♥」

「んふ、トイレで犯されてるのに興奮しちゃうなんてキミもすっかり人間の心を捨てちゃつたみたいだね。はあ、はあ、そらう、もうと激しくしてくれ♥」

「キミのお尻い、ふたなりチンポでかき混ぜるの、どうてもいいよ♥ 腰動かすの、止まらない♥」

「んふ、アナルズボズボしながら、乳首もカリカリ引っ搔いて良くしてあげるね」

「爪を軽く立て、両乳首をカリカリ、カリカリ♥」

「ほらあ、お尻ぐちゅぐちゅされながら、乳首、いっぱいカリカリ、カリカリ♥」

「んふ、もうとエッチな声出して、キミもお尻振つていいよ、んん、んん♥」

「乳首を強めに、カリカリ、カリリ、カリリつ、一緒に奥まで、こりこり抉つてあげるね♥」

「お耳もたつぱり舐めて、んれろ、れろじゅる、れろお、んれろれ、んれろお、れろちゅぱ♥」

「このままお耳を、んれろじゅる、いやらしくしゃぶられながら、肛門で気持ちよくなつちやそ、んれろ、れろちゅぱ♥」

「勃起した乳首も、指でつまんで、コリコリ、コリコリ♥」

「お耳も、んちゅば、ちゅばちゅ、ちゅばう♥」

「お耳と乳首、それに肛門で、んん、コリコリ、んちゅばちゅ、キミをめちゃくちやにしてあげる♥ ふう、ふう、キミのお尻の締まり、良すぎて、ボクも手加減できないよ、んう、んううう♥」

「本気の腰振りで、肛門まんこ、拡張してあげるから♥」

「お耳も、ツユだくで舐めしやぶつて、んちゅばちゅ、ちゅばう、ちゅばじゅる、ちゅばう、んふ、くふう…♥」

「ほらほらほらあ、お尻の穴、裏返りそなぐらい、混ぜ混ぜされながら、イケ、イケイケつ♥」「めちゃくちやにメスアケメつ、しちゃええつ、んんん♥」

「ボクも一緒にイクから、キミに種付けを、するう〜ツ♡♡」

「あくつ♡ んぐうツ……あつへううううう〜ン♡♡♡」

「んんん、いつたケツまんこに射精いい〜♡」

「はあ〜つ、気持ち良すぎ〜い…………♡」

「出してる間も、ずっとお尻の穴、きゅんきゅんしてえ、精液バキュームしてくれて、まだいつたままなんだね♡」

「んふ、くふう……キミもよくなつたみたいでえ、ははは、ボクもうれしいよ♡」

「眷属くんを良くしてあげるのは、主人であるボクの役目だから♡」

「けど、キミうてば、本当にエロくてアナル肉便器になるために生まれてきたようなマゾだよね。これからもいっぱいエロ可愛がつてあげるよ、んふ♪」